「真夜中の色をした」肉体
——"Pantaloon in Black" 試論——

金澤　哲

I

William Faulkner の短編 "Pantaloon in Black" は、彼の作品中、いろいろな意味で異色のものである。まず、この短編の主人公である Rider は、全く白人の血を引いていない黒人である。そして、Rider は自分の父と母を知らない。ということは、この短編の場合、Faulkner が繰り返し様々な形で問題にした父（父祖）と子の対立とか、あるいは（黒人の血を引く者を含む）何代にもわたる白人の名家の興亡といったものは、問題とならないのである。また、Rider は製材所の人夫頭であり、白人の名家に仕えているわけではない。それどころか、その彼の職業は、当時社会的経済的に差別されていた黒人が否応なしに割り当てられていた、典型的な単純肉体労働である。要するに、Rider は白人との特別な関係を全く持っていないのであり、そのような主人公は Faulkner の全作品を見渡しても、極めて珍しいものである。そして、そのためにこの短編は、Faulkner の黒人の生活や考え方を理解しようとする試みの中で最も進んだものであるとしばしば見なされている。

"Pantaloon in Black" は、また、それが一部を成す合成小説 *Go Down, Moses* の中においても異色の作品である。というのは、*Go Down, Moses* は 7 つの中短編から構成された一つの小説なのであるが、この "Pantaloon in Black" 以外の他の 6 つの作品はみな Carothers McCaslin を祖とする McCaslin 家の一族の者の物語であるのに、これだけは McCaslin 家とはほとんど何の関係もないのである。具体的に言えば、先に述べたように、

Rider は McCaslin はおろかいかなる白人の血も引かない純然たる黒人であり、彼と McCaslin 家との唯一のつながりは、彼が結婚後移り住んだ家が McCaslin 家の Roth Edmonds の所有だということだけでしかないのである。

それ故、"Pantaloon in Black" が *Go Down, Moses* 全体の中ではたしている役割はかねてから議論の的となってきた。また、それと同時に、南部白人の名家の出である Faulkner が、はたして、白人からの差別の下に生きる黒人の心理を正しく理解し表現しているかどうかも、同様に広く議論されてきている。例えば "Faulkner's Pantaloon: The Negro Anomaly at the Heart of *Go Down, Moses*" という論文を書いたWalter Taylor は、"Pantaloon in Black" の役割は、その後に続く "The Bear" において Isaac が主張する黒人の美徳を読者にあらかじめ印象付けることであるとした上で、Faulkner の Rider の描写は表面的であり、この短編は意図された役割をはたしていない失敗作であると主張している。[1] 一方、Joseph Blotner は Taylor とは正反対に、この短編を "one of the most powerful stories Faulkner had ever written" と評している。[2] また、小野清之は、"Pantaloon in Black" を「独立した短編として、フォークナーの短編の中で最も秀れたものの一つ」と見なし、さらに、その存在のために「*Go Down, Moses* は単なる McCaslin 家の年代記に陥ることなく、南部社会全体に及ぶ歴史を俯瞰した作品となり得ている」と結論している。[3]

"Pantaloon in Black" をめぐってこのように正反対の評価が生まれてくる根本には、しかし、この作品のプロットへの正反対の評価があるように私には思われる。そこで、この作品のプロットを、ここでやや詳しく確認しておきたい。この短編は結婚 6 カ月で死んでしまった Rider の妻 Mannie の埋葬の場面で始まる。Rider は、その大きな悲しみのあまり、葬儀において常識外れの振る舞いをした上で、集まってくれた人々を振り切って一人家に帰ると、そこで亡き妻の亡霊に会う。妻の亡霊に去られた彼は、一晩中野外にさまよい、翌朝には周囲の予想に反していつものよう

に製材所で働くが、彼はその仕事では自分が呼吸をしていることを忘れることができないと悟ると、これまで試みたことがないほどの大きさの丸太を一人で持ち上げてトラックから下ろそうとする。だが、その命がけの試みにも成功してしまうと、彼は突然その場を立ち去り、やがて密造酒を求め、何かに挑むようにその酒を飲み続けながら、夜の戸外をさまよう。一度だけ彼を育ててくれた叔母の家に立ち寄るものの、神に救いを求めよという叔母に反抗的な返事をした彼は、やがて、もう体がそれ以上酒を受け付けなくなるほど酔った挙句、真夜中に彼が働いている製材所に戻っていく。そこでは白人の夜警が黒人相手に長年いかさま賭博をしていたのだが、その夜、彼はそのいかさまを見破り、拳銃を抜いた相手の首をかみそりで切って殺してしまう。(以下は白人の保安官代理がその妻に語って聞かせるという間接的な形で描かれる。)その翌日、彼は逃げもせずに自分の家で寝ているところを保安官に捕まるが、彼は殺された夜警の一族にリンチされることなど何も気にしてはいないように、ただ保安官に自分を閉じこめないでくれと頼み、そして、実際に牢に閉じこめられてしまうと、その人間離れした腕力で牢を破ってしまうが、それでも彼は逃げようというそぶりは全く見せなかった。だが、彼はついに取り押さえられてしまい、やがて殺された夜警の一族の手に落ち、リンチにあい殺されてしまうのである。

"Pantaloon in Black" のプロットはこのようなものである。そして、これを描く Faulkner の文章は、抑えた筆致の下に強い緊張をはらんだ見事なものである。にもかかわらず、その文章の効果を離れて上述のプロットのみを見るとき、やはり、それは私にはかなり不自然なもののように思われるのである。率直に言って、いかに妻を失った Rider の悲しみが大きいとしても、それが Rider がいかさまをしていた白人を殺してしまい、その結果自分もリンチにあって殺されてしまうことの理由であるというのは説得力がないであろう。しかも、いかさまをしていた夜警を殺したときには彼はひどく酔っていたのであり、それ故、そのことを一種の自殺と考えることも、やはり無理であるように思われる。つまり、私には Rider が妻の

死を悲しむあまり、一直線に自分の死に向かって行ったとは思われないのである。それは一直線に読者を始めから終わりまでとらえて離さない文章の効果に、あまりに依存した読みではないだろうか。そして、Walter Taylor が "for the reader who looks beneath Faulkner's technical virtuosity for some genuine sampling of the sense of Negro life ..., 'Pantaloon in Black' can only disappoint." と言ったのは、おそらくこの作品の文章の効果とプロットの内容とのこのような食い違いに気がついてであるように、私には思われるのである。[4] また、Rider の幾度も経験する息苦しさ、ほとんど閉所恐怖症的な閉じこめられることへの恐れはどう解釈すればいいのであろうか。同様に、Rider の肉体の大きさやその力の強さは繰り返し強調されているが、それは一体どのような意味を持っているのであろうか。私にはこれらの問題は、妻を失った Rider の悲しみがあまりにも大きかったからというだけでは説明しきれないように思われるのである。以下では、今指摘したこの作品のさまざまな不自然な点を、本文を細部にまでこだわって読むことで、少しでも理解しうるものにしてゆきたい。

II

Rider の人並外れた体の大きさ・力の強さは、ことあるごとに強調されている。まず作品の冒頭で、彼は身長は 6 フィート（約180センチ）以上、体重が200ポンド（約90キロ）以上であるとされ、その手に握られたショベルはまるで子どものおもちゃのように見えたと説明されている。それ以後でも、彼が墓地から家に戻ってゆくときの足どりは "moving almost as fast as a smaller man could have trotted" と描かれているし、また、その夜野外をさまよう時の彼の足どりは "moving almost as fast as a horse could have moved over the ground" だったとされているのである。[5]

このような彼の人並外れた肉体は、いわば、彼の存在の根本にあるものであったように思われる。なぜなら、まず、それは彼の経済的な生活を支

えるものであった。彼がいい稼ぎを得ているのは、彼が誰よりも優れた肉体を持っていたからである。また、それは彼の自尊心の中心でもあった。彼が24歳で製材所の人夫頭をしているのは、何よりもその肉体のおかげであり、また、彼は自身の肉体的な力への自尊心から、普通なら二人がかりで動かすような大きさの材木をわざと一人で扱うようなことを時にしていたのである。そして、彼は小柄だった妻 Mannie 対し、「俺と数週間はおろか一日でも一緒に居たものの中で、小さかったのはお前だけだ」(139)[6] と言って、大きな犬を欲しがったのであるが、この言葉は、自分の恵まれた体格に対する彼のほとんど無邪気な誇りを、そのままに映し出している。さらに言うならば、そもそも、彼が "Rider" という名前を得たのも、そのぬきんでた肉体のせいであった。というのは、製材所で働く他の人夫たちや町の女たちが、彼にその名前をつけたのであるが、その名前はトラックから転がり落ちる材木に乗る彼の離れ技から来だものであり、また、それは、彼の性的な力の強さをも意味しているのである。[7]

そして、彼と妻との幸せな結婚生活を可能にしたのは、まさにその並外れた肉体だったのである。というのは、それこそ二人の生活の経済的な基盤をつくっていたものなのである。彼らの生活が当時の平均的な黒人よりも経済的に豊かであったことは、彼らが家賃を前払いした上で、貯金までしているという事実に十分に示されている。そして、Mannie が死ぬ前の 6 カ月間を思い起こさせるものの多くは、経済的な安定感に結びついている。例えば、それは Rider がわずか 6 カ月の間に直したベランダであり、彼が買ってやったストーブであり、また、彼が規則正しい生活の末に決まって週末に持ち帰ってくる 1 ドル銀貨の山であり、さらに、そのお金を持って彼女が買い物に行った足跡なのである。

このような彼の肉体が、しかし、死んでしまった妻と彼を隔てる越え難い壁となるのである。少し長くなるが、Rider が Mannie の亡霊と出会う場面、その段落をそのまま引用してみたい。それはまた、この短編を特徴づける緊張感あふれる文体の見本を示してくれるであろう。

Then the dog left him. The light pressure went off his flank; he heard the click and hiss of its claws on the wooden floor as it surged away and he thought at first that it was fleeing. But it stopped just outside the front door, where he could see it now, and the upfling of its head as the howl began, and then he saw her too. She was standing in the kitchen door, looking at him. He didn't move. He didn't breathe nor speak until ke knew his voice would be all right, his face fixed too not to alarm her. "Mannie,"he said. "Hit's awright. Ah aint afraid." Then he took a step toward her, slow, not even raising his hand yet, and stopped. Then he took another step. But this time as soon as he moved she began to fade. He stopped at once, not breathing again, motionless, willing his eyes to see that she had stopped too. But she had not stopped. She was fading, going. "Wait." he said, as sweet as he had ever heard his voice speak to a woman: "Den lemme go wid you, honey." But she was going. She was going fast now, *he could feel between them the insuperable barrier of that very strength which could handle alone a log which would have taken any two other men to handle, of the blood and bones and flesh too strong, invincible for life, having learned at least once with his own eyes how tough, even in sudden and violent death, not a young man's bones and flesh perhaps but the will of that bones and flesh to remain alive, actually was.*

Then she was gone. (140-141. 強調筆者)

この引用の前半部分は、"Pantaloon in Black" を特徴づける、極めて張りつめた文章で書かれている。それは具体的に言えば、形容詞・副詞をほ

とんど含まない短めの文章である。また、そこには挿入や限定用法の関係節がなく、そのために、文は前から後ろへと流れるように一直線に進んで行く。それに対して、イタリック体にした後半部分は、まさしく Faulkner 的と呼びたいような、抵抗感のある入り組んだ長い文となっている（これだけで1センテンスである）。この部分には形容詞も多用され、特に "insuperable" と "invincible" の二つのラテン語起源の形容詞は、この段落全体を通じて、ひどく目だつものである。そして、このようなことは全て Rider と Mannie を隔てる彼の肉体という壁を強調しているものなのである。そもそも、Rider が妻の亡霊と会うこの場面は、"Pantaloon in Black" の前半におけるクライマックスとでも言えるような部分である。そして、そこにおいて Rider の肉体というものがこのように強調されているのであるならば、それは妻を失った Rider の悲しみを照らし出すためのその場かぎりのモチーフ以上のものであると言ってもいいのではないだろうか。

Mannie との間を隔てる彼の肉体は、これ以後、しばしば彼の呼吸やそれに関係するもの（いびき、水を飲むときの息づかいなど）によって描かれている。そして、妻を失った Rider がどうしても妻と自分を隔てている肉体の壁を越えられないことは、彼が自分の呼吸を忘れようとしても忘れられないことに置き換えられて表現されているのである。野外をさまよい疲れて眠る彼のいびきが、苦痛のうめきのようではなく、武器なしにいつまでも一騎打ちをしている者のように聞こえたとされているのはそのためである。というのは、それは Rider が自分で自分の肉体を打ち負かそうとしていることを、暗示しているのである。また、Rider がこれまで挑んだことがないほど大きな丸太を一人で持ち上げようとしたのは、自分がどうしても呼吸をしていることを忘れられないからであった。そして、彼が酒を飲んだのも、やはりそのせいにされている。というのは、酒を飲んで、彼が妻が死んでから初めて「大丈夫」("all right") になったのは、語り手によれば、酒が彼の肺を包み込んで、その肺が夜の空気をかき分けて走る彼の体のように自由になったその時なのである。さらに、語り手は Rider の

悲しみと彼が感じる息苦しさを、あらかじめ結び付けて表現している。それは Rider が、墓地から自分の家に帰ってきて妻の亡霊に会う直前のことである。語り手によれば、その時、夕闇に満たされた部屋には彼が妻と過ごした6カ月間が一瞬間に圧縮され詰め込まれて、そこには呼吸できるほどの空気があるだけの空間もなかったのである。このように、Rider の感じる息苦しさというものは、彼の深い悲しみの、いわば肉体的な表現となっているのである。と同時に、その息苦しさは、越えることのできない肉体という壁を常に彼に思い起こさせるものなのである。

だが、語り手はなぜこのように Rider の悲しみを描いたのであろうか。注意しなければいけないのは、Rider が自分も死ねば妻と同じ世界へ行けるとは考えていないことである。確かに彼は、命がけで巨大な丸太を持ち上げたし、いかさまをした白人を殺したことで自ら死を招いたとも言えるであろう。だが、それらのことをした時に、彼がそのために死ぬことになるかもしれないと予想していたことを示すものは何もない。白人を殺した後、保安官に捕まった時でさえ、彼はリンチにあうことはおろか正規の法による処罰のことも何も恐れず、ただ、自分が息をしていることを思い出してしまわないように、閉じこめることだけはやめてくれと頼むのである。もし彼が、自らの手によるにせよ、他人の手によるにせよ、自分の死というものを望んでいたのであれば、ここで彼はもっと積極的に罰を望んだはずである。つまり、Rider は自分も死のうなどとは考えていない。彼が考えているのは、文字どおり、自分が呼吸していることをどのようにして忘れるかということなのである。これが語り手が Rider の悲しみを効果的に描くために用いた understatement であるならば、なぜ語り手は不自然に思えるまでその手段を使ったのであろうか。語り手と Faulkner を安易に同一視するのは問題ではあるが、あるいは、この点に Faulkner の黒人理解の限界を見るべきなのかもしれない。だが、それならばむしろ私はそこに、Faulkner の確かな意図を見たいのである。

というのは、Rider の肉体には、彼と死んでしまった妻との間を隔てる

壁である以外に、もう一つ、重大な意味があるのである。すなわち、彼のその「真夜中の色をした」肉体こそ、彼が黒人であり、白人から厳しく差別されて生きていることの紛れもない証なのである。実は、この作品の中で彼の肉体の色が言及されることは一度しかなく、しかも、それは作品の中程近くなってからである。だが、それは語り手によって、実に印象的に描かれている。

> Then the trucks were rolling. The air pulsed with the rapid beating of the exhaust and the whine and clang of the saw, the trucks rolling one by one up to the skidway, he [Rider] mounting the trucks in turn ... —himself man-height again above the heads which carefully refrained from looking at him, stripped to the waist now, the shirt removed and overalls knotted about his hips by the suspender straps, his upper body bare except for the handkerchief about his neck and the cap clapped and clinging somehow over his right ear, the mounting sun sweat-glinted steel-blue on the midnight-colored bunch and slip of muscles until the whistle blew for noon .... (143-4)

仕事に熱中している Rider の姿を描いたこの部分は、そのままいくつもの意味を持つ一枚の絵になっており、この短編全体の中でも忘れ難い場面の一つである。とりわけ、白昼の照りつける太陽の下で汗を輝かせている彼の肉体を描写する "midnight-colored" という形容詞は、彼がその肉体の内に秘めている悲しみの深さとその周囲のあらゆるものとの距離を示唆して、強烈な印象をもたらす。と同時に、ここに鮮やかに描きだされている白と黒の対照は、そのまま、白人の差別の下で生きることを余儀なくされている黒人の立場の表現となっているのである。すなわち、上から照りつける太陽は、黒人たちを支配し肉体労働に従わせる白人のあり方を象徴

し、汗を光らせ鋼のように青く輝く Rider の肉体の黒色は、白人の支配の下でその影のように生きざるをえない黒人のあり方の象徴となっているのである。要するに、この箇所において語り手は Rider の妻を失った悲しみと白人の下で差別される黒人のあり方とを、Rider の「真夜中の色をした」肉体によって、同時に一つのものとして見事に描いたのである。だが、さらに考えてみると、その白昼の太陽に照らされながらも、依然「真夜中」であり続ける Rider の肉体は、また、その内に秘めた悲しみの深さだけではなく、現に行われている白人からの差別・支配も侵すことのできない彼の存在をも象徴しているとは言えないであろうか。そして、先に述べたように、その彼の存在を支え、彼に自尊心を持たせていたものは、やはり、彼の人並外れた肉体そのものだったのである。だとすれば、このように Rider の肉体を描くことによって、語り手は白人の支配に屈しない Rider の姿をも、ここで暗示していたのである。

III

ここまで、語り手が妻を失った Rider の悲しみをその肉体を通して表現している理由について考え、また、Rider の人並外れた肉体の持っているさまざまな意味を見てきた。繰り返して言えば、語り手はRider の真夜中の色をした肉体によって、彼の妻を失った悲しみの深さと彼が黒人として白人からの差別の下に生きていることを同時に表現していたのである。そして、その肉体は、彼を死んでしまった妻から隔て、さらに、彼を白人の支配の下に縛り付けていたものだったのである。

だが、それにしても、なぜ語り手はそれら二つのことを彼の肉体に重ね合わせて一つのものとして表現したのであろうか。また、この小論の初めに指摘したこの短編のプロットの不自然さは、まだ説明されていない。すなわち、妻を失った悲しみが、なぜ Rider がいかさまをした白人を殺す理由となるのであろうか。なぜ語り手はそのような不自然なプロットを用いたのであろうか。この疑問に答えるためには、しかし、我々はまず、Rider

が妻に死なれたことをどのように考えていたかを調べなければならない。

妻を失ったことを悲しみ続ける Rider に対して、彼を子供の頃から養い育てた叔父は、次のように言って、彼を諌めている。"De Lawd guv, and He tuck away. Put yo faith and trust him." (145) この叔父の言葉はヨブ記からのもので、正確には、"The Lord gave and the Lord hath taken away; blessed be the name of the Lord" (1.21) であり、これは、全ての家畜と子供達を失った時、それにもかかわらずヨブが神を讃えて言った言葉である。それとは対照的に、Rider は妻が自分から奪われたことを、全く不当なことだと考えているのであり、それ故、上の叔父の言葉に対して彼は "Whut Mannie ever done ter Him? Whut He wanter come messin wid me and——" (145) と言って強く反発するのである。同様に、彼は叔母から神に助けを求めよ、神はお前の訴えを聴き助けたがっていると言われた時に、"Efn He God, Ah dont needs to tole Him. Efn He God, He awready know hit. Awright. Hyar Ah is. Leff Him come down hyar and do me some good." (150) と答えている。これらの彼の言葉を見れば、Rider はいわば神と対等の立場を求めていたのだと言っても、言いすぎではないであろう。別の言い方をすれば、Rider は神と自分との関係を対等のものではなく、不公平なものだと考えていたのである。

そして、結論を言ってしまえば、Rider のこのような考えこそ、実は、彼の妻を失った悲しみと、いかさまをした白人への怒りとを結び付けるものなのである。すなわち、白人が彼にいかさまや不当な取引を迫って来た時、Rider はそれを自分と神との不平等な関係と同一視したのであり、それ故に、決してそれを許すことができなかったのである。別の言い方をすれば、Rider にとって、神が不当に妻を奪っていくことも、白人が不公平な取引をたくらんだり賭博でいかさまを仕掛けたりするのも、同じことだったのである。そして、彼が自分にいかさまを仕掛けた白人を殺したのは、まさにそのためであった。

Rider のそのような考え方は、彼と密造酒を造っていた白人との取引の

中に、既にうかがうことができる。というのは、その時、Rider は酒を一瓶、代金を支払って手にいれたのだが、相手の白人は Rider の張りつめた様子に気付くと、ただで酒を少しやるから今売った分を返せと言うのである。無論、その白人はそう言って、もめ事に巻き込まれるのを避けようとしたのであるが、Rider にすれば、これは白人が気分次第で勝手に与えたり奪ったりする、不当な関係にほかならなかった。彼には、それは妻を奪っていった神の仕打ち同様、受け入れられないものだったのである。だからこそ、彼はそのような白人との関係を拒否して、白人の手を振り払い、"Hit mine. Ah done paid you." (147) と言って、あくまで対等の取引関係を主張したのである。[8)]

Rider がいかさまをしていた白人の夜警を殺したのも、全く同じ理由からであろう。すなわち、Rider はいかさまを仕掛けてきた白人に、妻を自分から不当に奪っていったなにものかと同じようなものを見たのである。そして、相手が神であれ、白人であれ、彼は自分から何かを不当に奪っていくものを許せなかったのである。それはまた、言い方を換えれば、Rider から見た時、差別する白人は神のように絶対的にそして気まぐれに自分たち黒人を支配する存在だったということである。そして、まさにそのような存在に対して Rider は反抗したのであった。このように考えて初めて、妻を失った悲しみに駆られた彼が、なぜ、いかさま賭博を仕掛けてきた白人を殺さなければならなかったのか、また、なぜ語り手がそのような一見不自然なプロットを用いたかが理解できるであろう。Rider がいかさまをした白人を殺したことは、白人の下で不当に扱われることを拒否するのと同様、彼が妻を奪い取られた理不尽さを決して受け入れないことを、示しているのである。

そして、このような Rider の考えが決して不自然ではないことは、この短編の結びの部分となっている、Rider の事件を振り返っている白人の保安官代理の言葉によって裏付けられている。というのは、現存するこの短編のタイプ原稿には、保安官代理が妻に語る次のような一節があるのであ

る。

> Of course, a white man that will shoot dice with niggers deserves about what he gets, but after all white folks cant afford to condone a nigger setting himself up to ~~judge, I dont care who he is~~ administer right and wrong, I dont care what the white man done.
> (訂正部分は Faulkner 自身による。)[9]

ここに引用した部分は、この短編が Random House から *Go Down, Moses* の一部として出版された形においても、また、それとは別に雑誌*Harper's* に発表された形においても、削除されているのであるが、この部分は、白人が黒人をあたかも神のように支配していたことを、差別している白人の側の意識から明らかに示していると言えるであろう。なぜなら、ここでこの保安官代理は、いかなる黒人に対しても、また、白人が何をしたのだとしても、黒人が白人のしたことの是非を判断することを許さないと言っているのである。それは、言い換えれば、白人は黒人に対し勝手に何を与えても、また、何を奪ってもいいということではないだろうか。黒人はただその白人の振る舞いを黙って受け入れるしかないのである。しかも、それはここでしゃべっている保安官代理個人の意見としてではなく、白人一般の考えとして述べられているのである。そして、ここで彼が "administer" あるいは Faulkner が後に訂正しているとはいえ、"judge" という動詞を用いていることも見逃せないであろう。それは保安官代理が自然に口にしたはずの法律用語であると同時に、まさに裁判者としての神の役割にふさわしい動詞なのである。それ故、保安官代理の上に引用した言葉は、Rider の認識が正しかったことを裏付けていると言ってもいいであろう。すなわち、白人からいかさまを仕掛けられ不公正な取引を仕向けられることは、当時の南部の黒人にとって、まさに妻を不意に奪っていく神の理不尽な仕打ちと同様のものだったのである。また、この文脈で考えれば、神がいか

なることをしようとも、ひたすらその神を信じよと言うことは、そのまま、白人がどのような仕打ちをしてこようとも、ただそれを黙って受け入れよと言うことと、同じことになるであろう。そして、Rider はそのどちらも拒否したのであった。

Ⅳ

"Pantaloon in Black" が、黒人の夫婦愛の強さの物語であると同時に、白人からの差別の下に生きる黒人の物語であることはこれまで述べてきた通りである。以下では、この短編が *Go Down, Moses* 全体の構成の中ではたしている役割について、もう少しつけ加えておきたい。

まず、指摘しておきたいのは、直前に位置する "The Fire and the Hearth" との関連である。"Pantaloon in Black" が黒人の強い夫婦愛を題材としている以上、それは "The Fire and the Hearth" に描かれている Lucas と Molly の夫婦を思い起こさせずにはおかない。実際、Rider は結婚した時に Lucas を見習って、家庭の象徴である暖炉に火をともしたのである。このことは、かねてから指摘されてきたことであるが、Rider と Lucas の関係はそれだけにとどまらない。ここで指摘しておきたいのは、Rider の物語が Lucas の物語と裏表の関係にあるということである。

Rider が死んだ妻のことを、自分から不当に奪われたと考えていることは、先に述べた。そして、彼にとっては、そのことは白人から不公正な取引を迫られることと同じことであった。だとすれば、その Rider の経験は、"The Fire and the Hearth" において白人の農園主 Zack によって妻を取り上げられた Lucas の経験と同じものであると言えるのではないだろうか。Rider がいかさまを仕掛けてきた白人を殺した時に自分から妻を奪っていった神に挑んでいたのだとすれば、Lucas は自分から妻を奪っていった白人とあくまで対等の地位を求め、そのためには自分がリンチにあうことをも覚悟して、その白人を殺そうとしたのである。そして、それぞれの妻の名前が極めて似ていることも、二人の経験したことが極めて似て

いることを暗示しているように思われる。また、Lucasが妻を奪われていたのは6カ月間であり、それは、RiderがMannieと一緒に暮らせたのと同じ長さなのである。さらに、*Go Down, Moses* 全体の詳細なchronologyによれば、"The Fire and the Hearth" においてLucasが埋蔵金探しに熱中したために妻Mollyから離婚を求められていた時に、RiderはMannieを失ったのである。[10] ということは、Riderが模範としていたLucasが妻との絆を捨てようとしていたまさにその時に、Riderは妻を奪われた不当さを受け入れることができず、さらにそのことと白人からの不当な仕打ちを同一視して、白人を殺してリンチにあったのである。これほど揃えば、Riderの物語とLucasの物語が裏表の関係にあると言ってもいいのではないだろうか。妻を奪われた不当さに抗議するRiderの姿は、ある意味で、彼が模範とした若き日のLucasの姿そのものである。そして、Riderが妻を奪われた不当さに抗議し、そのために結果的に死へと向かっていたその時に、老いたLucasがかつては命がけで取り戻した妻との絆を自分から捨てようとしていたということは、Lucasに対して皮肉な光を投げかけているのである。

一方、"Pantaloon in Black" はその後に続くIsaacを中心とする大森林を舞台とした狩猟の物語とも、深いつながりを持っているように思われる。無論、*Go Down, Moses* 全体を通じて、「狩り」が主要なモチーフの一つであり、Riderが白人たちによって捕えられリンチにかけられることもその一つの表れであることは、言うまでもない。ただ、ここではそのことをもう少し突き詰めて検討してみたいのである。具体的に言えば、黒人であったRiderが人間らしい感情を持たない動物だと言われていることと、熊にすぎないOld Benがそれを狩るIsaacたちによって人間のように言われていることを比較し、その意味を考えてみたいのである。

まず、"Pantaloon in Black" においては、まぎれもなく人間であるRiderが、白人の保安官代理によって、人間以下の動物であると言われている。彼は妻に死なれてからリンチにあって殺されるまでのRiderの行動が全

く理解できず、その妻に人間の格好はしていても黒人は人間ではない、正常な人間の感情ということになればあいつらはバッファローと同じだと主張するのである。一方、Old Ben の方は、熊であるにもかかわらず、長年の間狩猟者の手を逃れてきたという理由で、Isaac たちによってあたかも人間であるように見なされ、人間のような名前をつけられているのである。この対比自体、充分皮肉なものであろう。そして、そのことは Rider をはじめとする黒人を人間以下のものと見なす白人の残酷さをあからさまにしているだけではない。そのことは、また、狩猟の対象である熊を人間のように見なす Isaac たちの考え方への批判となっているのである。なぜなら、理解し難い行動をした黒人を人間以下と見なすのも、どうしてもしとめることのできない熊を動物以上に見なすのも、本質的に同じことなのである。つまりそれは、いずれも、南部の階級社会の頂点にいる白人たちが、勝手な自分たちの尺度によって自分たち以外のものを評価し位置づけているという点で、同じことなのである。すなわち、Isaac たちの Old Ben への態度は、実は、黒人に人格を認めようとしない南部の酷薄な階級社会を支えている考え方と表裏一体のものなのである。そして、そのことは、"The Bear" のなかで Isaac が理想視している狩猟者の世界が、実は極めて階級的であることと対応しているように、私には思われるのである。[11] このように考えてみると、"Pantaloon in Black" の最後で、取り押さえられた Rider が言う "Hit lool lack Ah just cant quit thinking. Look lack Ah just cant quit." (159) という言葉が、さらに重要な意味を持ってくるであろう。というのは、この言葉は、いかにしても妻のことを考えずにはいられない Rider の悲しみの深さを、まず示している。だが、それと同時に、なにかを考え続けるということが人間だけにできることである限り、それは、結局のところ Rider は人間であり、それ以下では全くないということの証拠なのである。そうであるならば、この Rider の最後の言葉は、白人が黒人を人間以下の動物であると見なすことの不当さを証明しているといえるであろう。そして、そのことに全く気付かない保安官代理の姿は、1

匹の熊をあたかも人間であるかのように見なすIsaacたちの姿を皮肉に照らしだしているように思われる。このように考えるならば、"Pantaloon in Black" は、後に続く狩猟物語において Isaac たちが動物を人間のように見なすことの裏に、人間を差別する階級社会が存在していることを、暗示していると言ってもいいのではないだろうか。

そして、そのように考えられるのであれば、Faulkner が "Pantaloon in Black" を *Go Down, Moses* の真ん中に置いたことは極めて適切だったと言えるであろう。なぜなら、この短編に描かれた Rider の物語は、まず、その前に位置する "The Fire and the Hearth" で描かれた Lucas の姿を思い起こさせると同時に皮肉な光を投げかけているのである。また、この物語は、その後に続く Isaac を中心とする狩猟物語を、やはり南部における黒人と白人の関係を描いたものと理解するための視点を提供しているのである。そして、ここで Faulkner が *Go Down, Moses* 全体の主題を南部における白人と黒人の関係であると述べたことを思い出してもいいであろう。[12] "Pantaloon in Black" においては、妻に死なれた夫の悲しみという普遍的な題材が、白人からの差別の下で生きる黒人のあり方と重ね合わされて描かれていた。すなわち、この短編は、南部における白人と黒人との関係を主題とする小説に、確かにふさわしいものであったのである。

註

1) *American Literature* vol. 44 No. 3 (November, 1972) pp. 430-444.

2) *Faulkner: A Biography* (New York: Random House, 1974) p. 1038.

3) 「フォークナー演習」(4)——'Pantaloon in Black'——、英語青年1984年11月号 pp. 22-24.

4) 前掲論文 p. 438.

5) Wiiliam Faulkner, *Go Down, Moses* (New York: Random House, 1942) p. 137, 142. 以後この作品からの引用は全てこの版により、ページ数はカッコに入れて本文中に示す。

6) "Ah needs s big dawg. You's de onliest least thing whut ever kep up wid me one day, leff alone fo weeks." (= I need a big dog. You are the only little thing that ever kept up with me one day, let alone for weeks.) 原文はこのように強い黒人なまりで書かれているが、ここでは、なにか特定の方言色をつけて訳すことは控えておくことにする。

7) "Rider" という名前に性的な含みがあることについては、Calvin S. Brown の *A Glossary of Faulkner's South* (New Haven: Yale UP, 1976) の "easy rider" の項参照。また、"Easy Rider" はあるブルースのタイトルであり、それと "Pantaloon in Black" との関連については、加藤貞通「*Go Down, Moses* と南部民謡」『言論文化論集』第II巻第1号（名古屋大学総合言語センター、1980.12）に詳しい。

8) *Go Down, Moses* 全体を通して、取引関係というものは重要なモチーフとなっている。そしてその中でも、上下の身分関係に基づく贈与と対等の人間関係に基づく売買の対照が、何度か繰り返されていることに注意（例："The Bear" に描かれている Old Carothers から彼の黒人の子孫への遺産や、あくまでも解放された代償を支払った Thucydus など）。

9) *Wiiliam Faulkner Manuscript* 16 vol. 1 (New York: Garland, 1987) p. 147-8. これは Faulkner が雑誌に掲載させるために代理人の Harold Ober に送ったタイプ原稿だと思われるが、実際に *Harper's* に掲載された時には、この部分は削除されている。そして、Faulkner が *Go Down, Moses* の一部として Random House に送った原稿がどのようなものだったかは不明であるが、とにかく、*Go Down, Moses* においてもこの部分は削除されている。そして、それが Faulkner 自身の意図によるものであったかどうかは、現在のところ、私には調べる方法が残念ながらない。ただ、Faulkner が *Go Down, Moses* の校正にほとんど関与していなかったことは確かであり、また、*Go Down, Moses* には明らかな誤植がしばしば見られる。それから推測してみると、この部

分を削除したのが Faulkner 自身の意図ではない可能性もあると言ってもいいであろう。この件に関しては、上記 *William Faulkner Manuscript* 16 vol. 1 に付けられた Thomas L. McHaney による Introduction と Joseph Blotner が *Uncollected Stories of William Faulkner* (Vintage Books Edition, 1981) に付けた Notes (p. 694) を参照。

(10) Meredith Smith, "A Chronology of *Go Down, Moses*", *Mississippi Quartely* 36, no. 3 (Summer 1983), rpt. in Arthur F. Kinney, ed. *Critical Essays on William Faulkner: The McCaslin Family* (Boston: G.K. Hall, 1990)

(11) "The Bear" に関してはいずれ稿を改めて論じてみたいが、そこに登場する Isaac の属する狩猟者たちの一団がやはり階級的であることは、その中での Native American の血を引く Boon や黒人である Tomey's Turl の位置を考えれば明らかである。

(12) Faulkner の Robert K. Haas 宛1941年5月1日付けの手紙。Joseph Blotner, ed. *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Random House, 1977) p. 139.